

第二十五章 混沌の日々

昭和五十一年（一九七六年）の正月は穏やかに明けた。

一月二十三日に開会された第七十七回通常国会の財政演説で、大平蔵相は、予算の大綱について演説した。予算規模は前年度当初予算に比べ一四・一％増、同補正予算（減額）に対して一六・六％増と景気面への考慮から五十一年度経済見通し（一三・〇％増）を上回る伸びとされたが、税収の落込みは変わらず、公債発行総額は七兆二千七百五十億円、このうち赤字国債は半分を越す三兆七千五百億円であり、公債依存度は二九・九％と前年補正後の二六・三％を上回るものとなった。

一月二十九日、予算の審議はいつになく順調にすべりだした。このまま進むなら、三月中旬に予算編成が終わり、首相が示唆するように、四月から五月には解散、総選挙となるかもしれない。政界関係者はひとしくそう考えた。だが、それは、ほんのたまゆらのことではしかなかった。

ロッキード事件の第一報は、二月五日の朝刊の片隅にのった小さな外電であった。だがそれは、その日のうちに、未曾有の激震となって永田町を直撃した。その外電は、米国のロッキード社が日本に対する航空機の売込みのために、児玉誉士夫に対して七百万ドル（二十一億円）を支払ったことを公表したと報じていた。

翌六日には、ロッキード社の副会長コーチャンが対日工作資金として日本の政府高官に二百万ドル（六億円）を流し、これに一人の実業家およびある商社の役員二人が関係していると声明した。

平穩裡に進行していた国会はにわか騒然となった。『日本政府高官』が誰かという疑惑は、自民党を一種の恐慌状態に陥れた。三木首相の対応もまた素早かった。三木は、六日の衆議院予算委員会で、「日本の政治の名譽にかけても問題を明らかにする必要がある。手の届く限り材料を集め、法規に触れるなら嚴重に処置する」と『徹底解明』の旗を掲げたが、全容を明らかにすべき資料のすべては米国にあり、したがって、まず流れたのは噂であった。新聞報道にのつたローマ字のイニシャルを手がかりに、該当者の穿鑿がはじまった。野党は名指しされた人物の証人喚問を要求し、二月十六日から予算委員会への七人の証人喚問が行われたが、全員が容疑を否定した。十八日、政府は、改めて米国に『政府高官を含む全資料』の提供を要請するとともに担当官の派米を決定したが、国会は、この事件解明の進め方をめぐって、十八日から二十五日まで空転した。

この頃、大平は記者たちのインタビュウに答えてこう言った。「いま全体としての対応ぶりは少し浮き足だっている。何があつたのか。いくつかの点は出てきているが、ピクチュア（画像）全体をいま少しふくらみをもって構成しないといけないのではないか。自民党という政党は間口が広い。一局面にそういうことがあつたとしても、それで『自民党はそういう体質だ』とカテゴリカル（無条件）にきめつけられることは迷惑だ……」。

「日本の国会では米国の議会に見られるような果敢な事実究明をやるだろうか」という質問に対しては、「それは日本民族全体の『力量』にかかってくる。……ギリシャの歴史を考えても、最後は国民だ。……『力量』以上の解決はむずかしい。しかし、それ以下の解決は困る。日本人は相当の判断力、バランス感覚を持っているので、私はまずい解決はしないと思う」と答えている。

二月二十三日、衆参両院本会議は全会一致で、米側に対し、資料提供要請決議を行った。だが、米側がこれに応ずるかどうかがわからなかったため、三木首相は、ただちに自らフォード米大統領に親書を送ると表明した。「関係者の氏名があればそれを含めて、すべての関係資料を明らかにする方が、日本の政治のためにも、日米関係のためにもよい」というこの親書の内容は、二月二十五日発表された。結局、米側の司法上の理由もあつて、公開を前提とした資料提供は行われず、日米間の「司法共助協定」という形で資料が日本側の検察に示されたが、それにしても三木首相のこの行為は、その後の事件の解明のあり方と政局の方向を決定的に左右するものとなつた。

大平蔵相は、三木首相の親書問題について、「実務者にまかせておけばよいものを、なんで政治のマトーにしなければならぬのだ」と苦々しげに感想をもらした。大平には、昭和三十八年末の周鴻慶事件や、四十八年の金大中事件の時のように、こうした厄介な問題は、できるだけ政治のレベルに引き上げず、実務担当者レベルで解決すべきだという信念があつたのである。

「実務者が厳正中立に真相の究明に当たり、真相が解明されれば司直の手で処断する。これがいちばんよい解決のみちで、政治はブレーキを踏んでもいけないが、アクセルを踏んでもいけない」と大平は言った。大平は、この点において、三木とは全く考えを異にしていたと言つことができる。

米側資料公開問題をめぐつて四十七日も空転をつづけた国会は会期延長もできぬまま五月二十四日に閉会した。財特法ならびに値上げ法案はすべて審議未了となり、景気対策には大きな打撃となつた。

他方、ロッキード事件は自民党の衆議院議員たちの間に恐慌を惹き起こした。前回昭和四十七年に行つた総選挙以来、四年の議員の任期がこの年の十一月に切れる。したがつて、次の総選挙までどう長くても五カ月しかないのに、党は世論の袋だたきにあい、囂々たる非難の中で国民の審判を受けなければならぬ。これを助長しているように見える三木首相の態度に不満がつつた。椎名副総裁の「三木ははしゃぎすぎる」

という言葉が、これらの不満を代表する表現として政界を駆けまわった。

椎名と親しかったある記者によれば、椎名は事件当初、三木に次のようなことを期待した。すなわち、自民党内閣でこのような事件を起こしたことを国民に詫び、事件の解明は検察の手に委ねる。司直の結論が出るまでの間、自民党の宿弊を打破するため、永年の懸案である党改革に着手することを宣言し、実行する。事件に関する司直の結論は謙虚に受けとめ、党として世論の納得のいく処分をする。党改革の体制が整ったところで、全責任をとって、総裁を辞任する。

だが、三木首相の動きは椎名副総裁の期待するところとは全く違っていた。党の総裁として自分の責任を感じるところか、ロッキード事件を自分の政権維持の道具に使おうとしている。少なくとも椎名にはそう見えた。こうして冬から春にかけて、椎名は、三木に退陣を迫る工作に動きはじめた。

椎名は密かに党内三木批判勢力の糾合に乗りだし、五月七日には田中、九日には大平、十日には福田と一連の会談を行った。これによって、四者は総選挙前の三木退陣という筋書きに合意したのである。椎名側近の構想は、国会終了後、直ちに行動に移り、椎名暫定政権を樹立した上、党改革と党首選挙の挙党体制を確立しようというものだったと言われる。

ところが、これが『読売新聞』のスcoopするところとなり、五月十三日に、一面トップでこの記事が掲載されるや、永田町は蜂の巣をつついたような騒ぎとなった。これを知った三木首相は直ちに反撃に出た。彼はその日の午後、日経連の定期総会のあいさつで、「政局を混乱させることは、国家国民のために許されない」と述べて、椎名らの動きを牽制する一方、福田、大平らと個別に会談して、『当面協力』の約束を取りつけた。

椎名らの工作が明るみになると、マスコミは一斉に「ロッキード隠し」としてこれを非難したが、三木にとって、大平はおろか福田までが椎名とともに反三木に踏み切っていたのを知ったことは、大きなショック

であった。それは三木政権樹立時の主流であった椎名、三木、福田、中曽根四派のうち半分が反主流にまわり、主流派が少数に転落したことを意味していたからである。そこで三木は、「事件の徹底説明は三木内閣の責任」という旗をさらに高く掲げて、党内における劣勢を世論の支持でカバーする戦術をとった。中曽根派の稲葉修法相も、「三木内閣は国民からロッキード事件解明の負託を受けている。……検察当局が意気阻喪する事態があつてはならない」と支援した。

そういう中で、大平は五月二十五日の宏池会の定例総会で、これまで控えていた政局に対する発言を行った。

「いま、自民党はロッキード事件で国民から批判を浴び、大変な危機を迎えているが、これを乗り切るには全党的な結束が必要である。これには、これまで一貫して長期政権の座にある間に党のいろいろな部分にたまってしまったアカを自ら洗い落とさなければならぬ。全党が『ミソギ』をするつもりで體質を改革し、反省して、新しく出直さなければならぬ。だれかが悪いと言うのでなく、全党員一人一人の問題として受けとめねばならぬ。とりわけ、党内閣で重要な地位についてきたものは、私を含めて責任を感じてやめるべきである。……すでに全党的な出直しという黒潮の大きな流れはそこに流れている。さざ波は立つても大きな底流は進んで行くであろう。同志諸君は、このさざ波に惑わされることなく、一致団結して事に当たってもらいたい」。

これがいわゆる大平の『ミソギ』発言である。

ミソギの意味や内容について、記者たちから質問された大平は、記者団に対して、「『ミソギ論』は党・政府首脳の退陣というネガティブな面だけで受け取られて困っている。将来、大改革に取り組むというポジティブな面もあるのだ」と説明している。大平自身、今後の方向について苦慮し、模索していたのであろう。彼はおそらく、党員が、一方は『三木おろし』に、他方は『真相究明』にのみ目を奪われている状態から、

時代が自民党に要求している『爾党』に目を移すよう訴えたかったにちがいない。

この頃、国会では、設置されたロッキード問題調査特別委員会が次々と民間側の証人を喚問して事件の究明にあたり、一方、党内では、実力者たちが会談を重ねて、事態收拾の方法を模索していた。

そういう中で、六月十三日、自民党の河野洋平、山口敏夫ら六名の若手・中堅議員が、「身を捨てて保守の再生をはかる」として、三木首相に離党の意を伝え、二十五日、新自由クラブを結成した。何でも反対というこれまでの野党の在り方に失望していた世論は、政界の新しい動きの芽として新自由クラブの誕生に好感を示した。

三木派と反三木派の確執はもはやどつにもならぬところまでできていたが、いずれにしても、しばらく事件の成行きを見守るほかはなかった。長老たちは、六月二十一日、三木、椎名、灘尾の三者会談を行い、ロッキード事件究明、適切な時期に臨時国会を開き重要法案成立を期す、など四項目が合意された。抗争は一時的休戦の形をとったが、両者の間に実質的な歩み寄りは見られなかった。

この少し後、三木首相と大平蔵相は、プエルトリコのサンファンで新しくカナダを加えて開催された第二回先進国首脳会議に出席した。大平は七月三日夕刻に帰国したが、その夜、夜回りにきた記者たちに対して、サンファンにおける三木・大平会談の内容を次のように説明した。

「三木さんは『ロッキードのことについて、自分は何も報告を受けていないし、報告を求めようともしていない』と何回も繰り返し返していた。ぼくが『党の問題はロッキード以前からあった問題なのだ。そこへロッキードが重なった。……だからと言って、現在、野党に政権を渡すわけにはいかない。体制を立て直しつつ政権を全うしなければいけないからむずかしいのだ』と言うと、三木さんも『全くその通りだ』と言った」。

この談話が正しければ、大平は決して椎名と同じように、三木に対して強く政権の交代を求めている。

何よりも「肅党の実現をどう果たしたらよいか」、彼の思いはそこに集中されていた。サンフランの会議ではキッシンジャー、米国務長官と隣り合わせて食事をし、キッシンジャーから、「三木で総選挙をやるのか、あるいは新指導者の下でやるのか聞かせてくれ」と言われ、「ぼくにもわからない。渦中にいるとかえってわからない」と答えている。

一方、三木、大平のこの訪米に前後して、ロッキード事件は最初の逮捕者を出した。六月二十二日の航空会社の幹部三名、商社の幹部一人につづいて、六回にわたって贈賄容疑者が逮捕され、政界関係者の逮捕は時間の問題と見られたが、それが誰であるかは、誰にも見当がつかなかった。

ただ、七月初旬、三木は法相からの報告を聞いたあと、側近に対して、「党内では私に対する退陣要求などといっているが、これから捜査が進んでゆけばどうなるのか、それだけの力が留守部隊に残っているのだろうかねエ」と語ったという。もしそれが真実なら、それは三木が何らかの情報を持っていたことを示唆するものである。

そして、七月二十七日早朝、田中角栄前首相、榎本敏夫前首相秘書官逮捕の報が日本中をゆるがせた。

「盟友」田中の逮捕は、大平にとっては限りない苦しみであった。翌朝、彼は、親しい友人、政治家らに電話をかけ、「昨夜はよく眠れなかった。悲しいことだと思つよ」と言い、「空しい」という言葉を連発した。大平の顔には憔悴の色がかくせなかった。

三木首相は、田中前首相の逮捕によって、田中とその支持勢力に悩まされることがなくなり、政治の局面は転換すると考えていたにちがいない。世論もそう思った。だが、党内の事態は三木の思惑とは違った方向に進んだ。

第一に、反主流勢力にとって三木批判がもはや「ロッキード隠し」として非難を浴びるおそれがなくなっ

た。第二に、ロッキード事件の解明を任ずる三木の役割は終わったという主張が成り立つことになった。とくに田中派は、三木首相に対して激しい敵意を抱き、八月四日の総会で、三木退陣を要求する決議を行った。

盛夏の政局は、その焦点を次第に三木政権後の受け皿の問題に集中するようになった。

当時、遊説のため香川県入りしていた大平は、八月七日、琴平町で記者会見して次のように述べた。

「自民党の党紀の弛緩、党勢の衰退が表に出てから久しくなった。そこへロッキード事件で痛手を受けたので、本来なら自民党は野党に政権を譲り、自らはドック入りして、活力の回復をはかることが民主主義のルール、党再生のみちのように思う。しかし、国民の間に、野党に政権を譲れとの声はなく、野党側にも受け皿の用意があるようには見えない。だとすれば、自民党としては自らの手で再生を模索するよりほかに道はない。課題は極めて厳しいが、時間の余裕はない」。

大平は、このように現在の野党との政権交代が不可能であることを指摘したあと、「肅党の実をあげるには、党内同憂の士と虚心に話し合って行くことに努めなければならない。福田氏が真剣、大胆に『出直し改革』を言われることは十分に理解できる」と言った。

同行した十余人の記者団は、この大平発言について、「あとは福田でもいいという気なのかな」と色めきたった。

大平がこの発言をした七日、福田は、群馬県に遊説中であったが、その夕刻、大平発言を受けて、「大平蔵の気持ちはよく理解できる」とエールの交換を行い、従来対立していると見られた二人に、連携の機運が進んでいることを示した。田中逮捕後、福田・大平の間には、事態を収拾できるのは、二人をおいてないと認識が共有されるようになっていたのである。

他方、自民党の中堅議員の間にも、党の現状をなんとかするために一役買おうという動きが高まった。中

間派の議員三原朝雄らを中心とする派閥横断的な親睦会「月並会」の有志たちは、三木首相に会見を求めて、天皇在位五十周年記念式典を機とした三木退陣を申し入れた。だが、九日、三木は自らの手で解散、総選挙に臨む決意を表明して、この要求を退けた。ロッキード事件で党内がこれだけ混乱しているときに、総選挙を打たれては、三木派の候補者はともかく他派の候補者がバタバタ落選することは目に見えている。三原をはじめ「有志議員」は、憤激して反三木の連判状に署名を集めるという行動に立ちあがった。

党内抗争が表面化して以来、福田も大平も、事態の平穏な收拾を図るため、それぞれ数次にわたって三木と会談していた。それは短い時で三十分、長い時には二時間、三時間にわたった。しかし、会談は、具体的な解決策になると堂々巡りして、一歩も進まなかった。八月十二日の朝に行われた三木・大平会談は二時間に及んだが、会談後、記者会見に臨んだ大平は次のように言っている。

「三木さんからは、現体制で難局を乗り切り切りたいとの強い意向が示された。……この事態を乗り切って行くには、党員の協力と理解が得られなくてはならない。さらに広く国民の理解と信頼を得なくてはならない。三木さんが、現体制で何とか行きたいというのは、それなりに理解できないわけではない。ただ、それが党内外の理解と支援を得られるかどうかだ。……皆が考えている問題や思いや願いをどのように吸い上げていくかを真剣に考え、しかも党を守っていかねばならない。むずかしいことはよくわかるが、会談を重ねていく過程で合意し、相互に検討していかなければならない課題だ……。具体的方法はこれからだ。われわれは評論家ではない。限られた時間で何とかやっつけていかねばならない」。

要するに、具体的には合意も進展もなかった、ということである。福田、大平が攻めあぐねたというのが真相かもしれない。

こうした中で、三原たちが開始した反三木の署名集めは、燎原の火のごとく拡がり、わずか一週間の間に、

田中、大平、福田の反主流派、ならびに椎名、水田、船田の中間三派の国会議員二百七十七名の多数がこれに賛意を表した。この連判状で集まった議員は八月十九日、『挙党体制確立連絡協議会』（略称『挙党協』）を結成、船田中が代表世話人となった。

挙党協側の言い分は、「ロッキード事件を全党の問題として受けとめ、臨時国会前に三木総裁以下総退陣し、党大会を開いて爾党の実をあげる。そこで党刷新の具体的方針を決議し、これを実行に移す挙党的な新体制を確立する。この上で臨時国会に臨み、全党をあげた選挙体制で国民の審判を受け、政局を安定する」というものであった。これに対し、三木陣営の主張は次のようであった。「ロッキード事件の解明は三木内閣の責任であり、国民の支持を受けている現体制で臨時国会に臨み、総選挙後、新しい党体制を確立する」。双方とも、選挙情勢がきびしく、それに耐えぬくにはどうしたらよいかという問題意識の点では一致していたが、ちがっていたのは、総選挙と党刷新のどちらを先にするかということである。総選挙のための解散は国会の会期中に行うというのがこれまでの慣例であり、したがって、近く予定されている臨時国会をいつ開くか、それまでにどのような手を打つかをめぐる綱引きとなった。

八月十九日、三原ら有志議員は二百七十七名の署名をそえ、両院議員総会の開催を要求したが、三木・中曾根執行部が拒否したため、挙党協は上原正吉両院議員総会会長に両院議員総会の招集を求めた。

八月二十一日の三木・福田会談で、三木は福田に「それではボクが退陣したあと、大平君と君の二人のうち、どちらが総理になるのか」と言った。大平との間で提携の合意はできていたものの、どちらが政権を担うかという微妙なところまでまだ詰め切れていなかったため、福田は返答に窮し、三木が一本とった形となった。福田は、大平とも近い側近を呼んで、この問題について極秘裡に話を詰めるよう工作を依頼した。

大平の心境は単純ではなかった。話し合いを拒否し党則によって公選ということになれば、政権はまず間

違いなく自分にまわってくるであろう。政権を担当するのは政治家の理想でもある。政策も長い間かかって準備してきた。意欲も体力も決して誰にも負けるとは思わない。いま、政権を前にして、これを他に譲るということが政治家として採るべき道であるのか。それが政治家の責任を果たすことであるのか。だが一方、ここには長い抗争に明け暮れ、疲弊しきつた党がある。もし公選によって新たな争いが起きれば、党は果たしてその存在を全うすることができるだろうか。

しかし、少しでも動きが洩れれば政権を私議したとの世論の攻撃を浴びる。話し合いは、その後、深く静かにつづけられた。

二十三日、上原会長名で両院議員総会招集の通知が出された。日時は二十四日午前九時半から、場所は衆議院別館五階のホールである。

党大会に代わる両院議員総会は、党大会に次ぐ党の最高意思決定機関で、ここで議決された決議は直ちに決議となる。その成立要件は構成員の三分の二以上の出席であり、拳党協の二百七十七名はそれを超えている。すなわち、もしこのとき両院議員総会が成立するとすれば、それは党大会が持つすべての権能を持つということになるのである。党則を変更することもできる。解党の決議もできれば、党員の除名もできる。党総裁、副総裁の任命もできる。だが、党執行部が否認していた場合、この会合に決定機関としての正統性があるのかどうか。その点が明らかにされぬまま事態は進んで行った。

こうして開かれた両院議員総会では、三分の二の二百六十六名を一名上回る二百六十七名以上が出席したことが確認され、決議は「臨時国会前に党一新を期する」という抽象的な表現におさえられた。出席した多くの議員は、この会合によって大勢は決し、一挙に三木内閣を退陣に追いこめると考えていた。だが、問題はそれほど単純ではなかった。

最大の問題は、かりに党大会に代わる両院議員総会が正式に成立し、除名等の手段によって三木首相を総裁の座から追うことができたとしても、首相の座からおろすことはできないということである。国会を召集し、内閣不信任決議案を成立させて退陣を迫ろうとしても、首相の側には国会の解散という手段が残されている。こうなれば党の分裂も必至であろう。対立抗争のまま総選挙に突入したのでは、勝利どころか過半数を獲得することも覚束ず、そもそも拳党協の趣旨に反してしまふ。拳党体制で党の面目を一新し、国民の審判に耐える姿を作り出すという拳党協の本旨を実現するためには、何としても円満な話し合いで決着をつけなければならぬ。三分の二による党議という形は、一見、三木首相に対する生殺与奪の権を握ったように見えたが、実は、話し合いを速やかにまとめるための体制づくりにはすぎなかつたのである。

このような党の大勢を背景に、福田、大平の両者が三木首相と話し合うことになり、その会談に大きな期待が寄せられた。

福田と大平は、この日（二十四日）ただちに三木首相に会談を求めた。はじめは難色を示した首相も、井出官房長官らの説得によって午後五時から首相官邸の執務室での会談に応じた。会談は延々三時間にわたつたが、その日は結論が出ないまま差し掛けとなつた。会談後、大平は周辺に対してこの日の感想を述べた。

「話は、主として福田さんと三木さんがやって、僕は聞き手というか、話を整理し進める役割をやつた。福田さんがいろいろ説得するのだが、三木さんは話が少し進むとまた元に戻つてしまふ。何度話しても、結局元のところに戻つてしまふ。毀れたレコードのように一つところをグルグル巡つていて、いつまでたつても話が進まなかつた」。

勢いこんで二人を官邸に送り、じりじりしながら会談の結果を待つていた拳党協の面々の顔には、失望の色が隠し切れなかつた。

翌二十五日に開かれた二回目の三者会談は、当面の事態をどうするかという話に入った。大平はその問題

点を八月二十七日の記者懇談会で次のように語っている。

「問題の焦点は、選挙前の政局一新をどうサジェストするかだ。退陣時期の明示は無理だろう。これも信頼関係があれば簡単だが、これが危殆に瀕している。私は総選挙前に党大会を開いて、たまったア力を落とすべきだという考えだ。三木さんは三者会談で、臨時国会中は解散しないことを総務会で約束してもよい」と言っていた。

拳党協実行委員会は三者会談の結果に不満の意をあらわし、福田も大平も頼むに足らずとして、党議実現推進委員会を発足させ、自民党きつての政治手腕で知られる保利茂がその委員長となった。

党内の激突を憂慮した中曽根幹事長、灘尾総務会長、松野政調会長、石田幹事長代行、安井参議院議員会長の五役が三十日、三項目からなる收拾案を作り、これを三木首相に示して了承を取りつけ、三木は、福田、大平との会談でこの收拾案を説明して、協力を求めた。

五役案は次のようなものであった、

- 一、臨時国会前に、党、内閣の人事を刷新する。
 - 二、臨時国会を早期召集し、重要法案を処理する。
 - 三、臨時国会終了後、総選挙に臨む体制を整え、党内外に明らかにする。
- 福田と大平は、記者会見で、「五役案の趣旨は理解した」と発言したが、拳党協は、三木退陣の保証がなく、三木による解散のみちを縛っていない、と猛然とこれに反対し、保利党議実現推進委員長を表面に立てて、あくまで両院議員総会の決議の実行を迫るといふ態度で執行部に臨むこととなった。

保利茂は、三木がすでに、首相の権限によって国会を召集し、ただちに解散に打って出る決意をしていることを見ぬいていた。といって力を頼んで無理押しすればどういふ結果となるかは、彼にとつて自明であつ

た。党内三分の二の力を擁しながら何の手も打てない自分に、保利は齒がみする思いであつたらう。

彼に親しい記者の一人によると、この時保利は、「全く打つ手なしじゃ。党をこのような潰滅状態において、これを若い諸君に引きついで行かねばならないのかと思つと、わしは情けない。二十年、三十年、何のために政治をやつてきたのか。先輩諸氏に申しわけない」と言つて、滂沱と涙したという。

この話を記者から伝えられた大平は、もうそろそろ決着点にきたと考えたものであろう。この夜、夜回りにきた記者との懇談で、次のような比喻を語つた。

「或る若夫婦がいる。夫婦ゲンカがこじれてどうにもならなくなつてゐる。それでは、双方の言い分を聴いてもらつて、最後の決着をつけようと家庭裁判所へ行く。そこで調停委員に『それなら断乎別れてしまえ』と言われる。二人は最後だからということで裁判所の前の喫茶店に入つていく。お茶を飲みながら昔の思い出話などしているうち、忘れていた相手のよさなどを思い出す。小一時間ほどして、ニコニコしながら昔の喫茶店を出てきた二人は『もう一度新たにやり直そう』ということになる。そういうこともあるのではないか」。

九月十日、三木首相もついに意を決し、臨時閣議を開き、「総選挙に臨む党の体制については、十月中に臨時党大会を通じて、党内外に明らかにする。……来る九月十三日をメドに臨時国会を召集する決意のもとに、必要な手続きをとる」という総裁所信を表明することとした。前段は、挙党協の主張であり、後段は三木自身の決意である。閣議を前に三木は、この方針を福田、大平に伝えた。

臨時国会が開かれてしまえば、解散は三木首相の意のままである。福田、大平は、党内調整を理由に閣議決定を一日だけ待つことを求めたが、首相の決意は固く、召集予定日を九月十六日に延ばすよう譲歩はしたものの、この日臨時閣議を開くことについては譲らず、閣議は予定どおり九月十日の午後五時から開かれた。

国会の召集も解散も総理大臣の大権であるが、それには内閣全員が署名する閣議決定が必要である。した

がつて、もし署名を拒否する閣僚がいる場合に、これを強行しようとするれば、総理大臣はその閣僚を罷免しななければならない。そしてこの時、三木内閣の閣僚二十二名中、挙党協に属する閣僚が十五名いたのである。三木首相は、臨時国会召集について文句があるものは遠慮なく言ってくれ、そのかわり、自分の主張に反対の閣僚は辞めてもらいたい……という決意をにじませた高姿勢で閣議に臨んだ。これに対し、挙党協側の閣僚は、「三木首相の行動に不信が強いとき、党内コンセンサスを得ないまま、何故、今日中に臨時国会召集を決めねばならないのか。党内調整のため一両日の時間をかけるべきで、今日の手続きは待ってくれ」と署名拒否に出た。

政局收拾に当たっていた中曽根幹事長は、後にその頃を振り返って、「三木さんは、十五閣僚を罷免しても臨時国会の召集を強行し、冒頭解散に出る決意だった。その場合、はっきり党分裂も決意していた」と三木の非常な決意を語っている。

閣議は三木周辺の予想を裏切って短期決着はつかず、予定外の夕食休憩をはさんで断続的に続けられ、延々五時間に及んだ。その結果、坂田防衛庁長官ら中立的閣僚の提案によって、その日の危機は回避され、臨時国会召集日の決定は十一日午後の持回り閣議で行うということに決まった。

午後十時に閣議が終わり、十一時過ぎに帰宅した大平は、応接室で待っていた記者団から、閣議の様態、政局の見通しについて、矢継ぎ早の質問を受けた。記者団は大平の発言から、「三木の決意が固そうなので、明日は、十五閣僚の辞職を求めて、持回り閣議で臨時国会を召集するだろう。そうすれば、冒頭解散だし、党の分裂は必至だ」という印象を受けた。

この夜遅く、大平邸を訪ねた田中六助衆議院議員は大平から、「このままでは党の分裂は必至だ。なんとかならないか」と言われた。田中は、翌十一日早朝に、再び大平邸を訪れて、大平に、中曽根幹事長との秘密会談による事態打開を提案した。

朝七時、大平と中曾根は、平河町にある中曾根の個人事務所で、差しで三十分あまり会談した。この時が党の分裂を回避するギリギリのタイムシグであった。

「あの前から事態收拾の動きはありました。党五役收拾案が出された段階から、打開工作が進められていたのです。私は、十一日の朝、電話で『会って話し合わないか』という連絡を受けたとき、これで事態は收拾されると直感しました。大平さんも私と同じことを考えておられたのではないかと思います」。

これが会談についての中曾根の印象である。

会談は、時間にすればわずかであったが、事態が差し迫っていたのと、大平、中曾根両者が、三木、反三木両陣営の妥協について検討しつくしていたこともあって、実のある会談となり、次のような一つの收拾案が作成された。後に中曾根私案とも大平私案とも言われるものだが、いずれにしても、そこには收拾工作に当たった人々の考え方が凝集されていた。

一、両院議員総会を十四日に開き、総裁は所信を直接党員に表明する。会議は節度ある整然たるものにするよう努力する。

二、先般の総裁所信による党大会を十月中に開催する。議題は総裁と党大会準備委員の間でつめる。

三、臨時国会において重要法案成立に一致協力する。したがって解散は考えない。この旨、総裁は議員総会で表明する。

四、午後五時に正式閣議を開き、臨時国会召集を決定する。

この四項目は五役收拾案や十日の総裁所信、また挙党協側の主張をそれぞれに盛り込んだものであった。

『幹事長提案』を持った中曾根の行動は敏速であった。彼は、大平に会ったあと、福田、三木に会い、説得につとめた。

党側では直ちに五役会議が開かれ、『幹事長提案』で收拾に当たることを確認した。この日午後零時半、党

本部における三木総裁、中曾根幹事長、船田登党協代表世話人、保利茂党議実現推進委員長の四者の会談で幹事長提案は了承され、臨時国会の召集は九月十六日と決まった。

拳党協側でも午前中に両院議員総会を開き、同じく幹事長提案を了承している。

急転直下の解決であつただけに、事の真相を知らない多くの議員たちは、「まるで迷走台風みたいだ。大雨を降らせたり、カラッと晴れたり、それでいてちっとも近くにこない。なんだかわからないが、解散だけはないらしい」と呆然としたり安堵したりする幕切れとなつた。

大平・中曾根会談に赴くため朝駆けの記者たちをまいて慌てさせた大平は、その埋合せのつもりか、昼頃、国会内の議員食堂で、記者たちに昼飯とクリームソーダをご馳走し、懇談を行った。四者会談が始まつたという情報が入ると、大平は「いまちようど喫茶店に入ったところだ」と先夜の離婚話にたとえて、ニヤツと笑つた。